

○小田巻淑子\*、 小林茂雄\*\*

(\*東京服飾造形短大、 \*\*共立女大)

<目的> 髪のカラーリングは、ここ数年、ごく日常的なおしゃれとして、定着してきている。なかでも若年層において、その傾向が顕著であり、カラフルな色彩のカラーリングの流行もみられる。そこで女子学生を対象に、髪のカラーリングについて調査し、ファッション行動と関連づけながら考察した。

<方法> 首都圏在住の20歳前後の女子学生157名を対象とし、1999年11月から12月に調査を実施した。調査内容はカラーリング経験やその動機、さらに予備調査をもとに選定した、髪のカラーリングに対する意識15項目(5段階評定尺度)、カラーリングの色の好ましさを(5色、5段階評定尺度)、ファッション行動に対する意識8項目(5段階評定尺度)、就職活動時における対応、男性のカラーリングに対する意識などである。これらのデータは単純集計、因子分析、相関分析などにより解析した。

<結果> 髪のカラーリングは、経験有りと回答したものが89.2%、5回以上が61.4%と過半数をしめ、動機については、髪が軽やかにみえるからが75%で最も多く、カラーリングしたことのある色は、ナチュラル系ブラウンが80.7%、ブリーチ(黄色系)が50.0%あり、カラーリングの色の好ましさをの結果と同じ傾向を示した。カラーリングに対する意識については、(衣服と同様に髪の色も自由に変えてもよいと思う)(服装をコーディネートする時、髪の色は重要である)などの意識が高く、因子分析の結果からも、ファッション性、おしゃれ演出などの5因子が抽出された。これらの因子とファッション行動に対する意識、およびカラーリングの色との間には、有意な相関がみられた。